
Fateクロス

ロージ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fateクロス

【Nコード】

N2229X

【作者名】

ロージ

【あらすじ】

Fate/stay nightといろいろな作品のクロスです。

注意は必ず読んでください。

必ず読んでください 【注意 説明 更新】

読むに当たったの注意です。
必ず読んでください。

・長編小説で投稿していますが短編集のようなものと考えています。
・このSSは私(roji)が設定など深く考えず、書きたいと思
ったことを書いたものです。矛盾、設定的におかしい、キャラ崩壊
などあると思います。

・つつこみどころ満載ですがまじめに読まずに、軽い気持ちで読ん
でくださったほうがいいかなと思います。

・この注意を呼んでくださった方は各SSの説明にも目を通してく
ださい。

この4点がどうしても許せない方は戻ったほうがいいと思います。
私は読者様にアドバイスをいただけると大変嬉しいのですが、大幅
な変更はしないのでとてもなく不快な気持ちになる方がいると思
いますので初めに警告しておきます。

【説明】

・x恋姫

Fate/hollowの士郎の人間関係のようなものです。出てこないかもしれませんがセイバーは現界していて、凜と桜との関係も良好、イリヤも生きています。

世界中を回っていて、少しアーチャーよりになってきているという設定です。

キャラ崩壊していると思います。

あとはなるべく原作に近づけたいと思っています。

また私は三国志について詳しくないためネットで調べたことを書いています。そのため間違いが多いと思います。

単位についてもいろいろと難しそうなので現在の秒分時やメートル、グラムなどの単位を使おうと思っています。

・xまじこい（タカヒロ作品）

世界観が大幅に変えていますので注意です。

俗に言うSHIROU物です。士郎君を強くしています。（どちらかというとTypeMoonのキャラを強くしています）

魔術は一般的に使用されています。ただし危険が伴うため元々からの魔術師の家系以外にはあまり使用者はいません。

時間軸のおかしいです。あと無理やり人間関係をつなげようとしておりますので、いろいろおかしいと思いますがそのところは勘弁してください。

SHIROUは蒼崎青子を師匠として、千年城で修行している設定です。TypeMoonのキャラとも無理やり人間関係つなげております。

やはりキャラ崩壊していると思います。

・xリリカルなのは【嘘予告】

とあるFate xなのはSSをよんで突発的に書きたくなったものです。

そのSS作者様には確認を行っておりませんので、そういうのはやめたほうが良いというような意見があれば

遠慮なんてなさらずに書いてください。絶対です。

言ってくださればすぐに消します。

私はなのはについてそこまで詳しくないので短いSSですがおかしな点があるかもしれません。

【更新状況】

10月31日・・・x恋姫2

xリリカルなのは【嘘予告】

10月3日・・・x恋姫

xまじこい

× 恋姫1 (前書き)

真・恋姫十無双とのクロスです

× 恋姫 1

【出会い】

目が覚める。

目の前に広がる絶景。広大な平原に高くそびえる山脈。言ってしまう
えば、日本では絶対に見ることが出来ない光景である。
そんな景色の中で身体に常にたたきつける、まるで実体を持ったか
のような大気。

俺こと衛宮士郎は現在絶賛落下中である。

「いや、なんでさああああ〜〜〜」

昨日は久しぶりに帰った衛宮の家で寝てたはずなのに。それがどう
して、こんなに高いところから落ちる破目になっているんだ。

「くそッ、トレース同調・オン開始」

落ち着くんだ、衛宮士郎。

とりあえず身体と服に『強化』をかける。この高さから落ちたら余
裕で死ねてしまう。

身体の体制を整え、落ちたときに来るであろう衝撃に備える。

そこまで考えてから、ふと下のほうを見る。

……人間がいる。

この速度で当たれば俺だけじゃなくてあの人たちも危ないんじゃない
か？

いやいや、危ないなんてものじゃなくて、死んだっておかしくない。

「ちよっ！ どいてくれ〜」

どうにもならないとわかっていようが叫ばすにはいられない。普通に生活していて人間が空から降ってくる、なんて考えるわけがないもんな

「ん？ アニキ、なんか声が聞こえませんでしたか？」

「あ？ お前も聞こえたか。どこからかわかんねえか？」

「さあ、どこですかね？」

思ったとおり彼らは俺が徐々に近づいていることには気づかない。逆の立場だったら俺も似たようなものだっただろう。

「————ぐはっ」

運よく人に激突することもなかったし、なんとか（・・・）着地は成功。それでもあまりに高いところから落ちていたようで、当たり前だがだいぶ体を痛めてしまったようである。

両足首を強くひねり、おそらくあばらも何本か折れていることだろう。今無理して動いたらアキレス腱が裂傷してしまうかもしれない。しかし運がいいのかわからないが、下にいた人たちにあたらなかった。

「ア、アニキ。空から人が落ちてきやしたぜ」

「あの〜、大丈夫ですか〜」

「……」

さっき激突しそうになった三人組の男たちがこちらを訝しげに見ている。

一人目は背が小さい男。落ちてきた俺を見て純粹に驚いているようだ。

二人目は長身でまるまる太った大男。心配してくれているみたいで、大きな手をこちらに差し出してくれている。

三人目はほっそりとしていて、だがしつかりと筋肉がついている男。まるで品定めしているかのようにこちらをじっと見ている。

「すみません。ちょっと今立てないみたいです」

とりあえず返事をしながら、差し出してくれている手を収めてもらう。

そうすると三人目の男が声をかけてきた。

「おい、兄ちゃん。服脱げや」

・
・
・
「……は？」

えーっと、落ち着け。この人は俺に『服を脱げ』って言ったよな？
考えるんだ。なぜこの人が俺に服を脱ぐことを強要するのか。

うーむ……わからん。

まさかだけど、ホモさんとかじゃないよね？

「おい、聞いているのか？ ほら早くその服よこせよな。傷つけん
じゃねえぞ」

あーなるほど。どうやらこいつらは強盗のようだ。それなら俺に服を脱ぐように命令したのも納得である。

でも、今来ているこの服ってそんなに珍しいだろうか？

ジーンズにT-シャツ、あとなぜかは知らないが真紅の外套を着ているだけなんだけなんだが。というよりも、こいつらの着ている服の方が珍しい気がするんだけどな。

「おい早く置いてけよ。俺は気が短いんだ。あんまり待たせやがったらお前を殺しちまうかもしんねえ。いいか？ 1回しか聞かねえぞ。」

お前は俺たちに服をくれるんだよな？」

いくらなんでもそれは無理なお願いだ。ここが日本でないとしても、大人が裸になつていたら捕まってしまう。

猥褻物陳列罪なんかで捕まったら遠坂に殺されてしまう。いや、その前に桜の黒いのに…

あれ、思いだせない？ おもいだしたくない？ オモイカエスノガコワイ？

と、とともかく、ここで捕まってしまったら俺の命が危ない。

「断る」

「はあ。若造よ、俺はさっき言ったよな？ 一回しか聞かねえぞつて。俺にしては優しくしてやったつていうのに。いまさら後悔したつて、もう後戻りなんてできねえぜ。」

チビ、デブ、こいつを殺せ！ なるべく服に血がつかねえようにしろよ」

「へ、へえ。アニキ」

「でも、アニキ。わざわざ殺さなくてもいいんじゃないっすか」

「うるせえ、デブ。俺が殺せつて言つてんだから黙つて殺しな」

「うう。わかりました、アニキ。ごめんね、アニキの言うことは

絶対だから、仕方ないんだよ。」

まいったな。服を奪われるわけにもいかない。

はあ、今戦闘を行った場合、下手すればさつき痛めた足がしばらく動かなくなるかもしれないが、現状的に四の五の言ってられる状況じゃない。何度も言うが、ここで服を取られることはイコール死に等しい。

悲鳴をあげている身体を強化する。

そして、さあ立とう、と足に力を入れようとした瞬間、

目の前に颯爽と現れた一人の少女があつという間に三人の男を倒してしまった。瞬く間にといふのはまさしくこういふことを言うのだらう。

膝のあたりまで伸ばしている長く、美しい黒い髪。まさしく美少女といった彼女はその細い腕からは考えられない力で槍を操る。その少女は啞然としている俺を見て、

「お怪我はありませんか？ 天の御遣い様」

と言った。

~~~~~

### 【桃園の誓い】

今、俺の目の前で歴史的にも有名すぎる誓いがなされている。

？桃園の誓い？

その人徳から数多くの優秀な人間が慕ったとされる  
劉備玄德

美髯公と呼ばれ、武勇に優れ信義に厚いと称された  
関羽雲長

一人で一万の兵に匹敵する、とまでの武勇を誇った  
張飛翼徳

この3人による誓い。

「私達三人は姉妹の契りを結んだときから、心をひとつにして助け  
合い、」

「飢えや争いに苦しんでいる者を救うことをここに誓おう。」

「同年、同月、同日に生まれはしなかったけど、」

「……願わくば同年、同月、同日に死ぬことを……！」

この桃園の誓いは正史には存在していなかったといわれている。  
だが、いま俺が見ているのは間違いなくあの桃園の誓いなんだろう。  
そもそも劉備、関羽、張飛というあまりにも有名すぎる名將たちが  
女性である時点で、ここは俺のいた世界とは全くの別物だと考えた  
ほうがいいのかもれない。

『平行世界』

今考えられる可能性はこれしかない。

なにがきっかけでここに飛ばされたかは知らない。しかし、元の世  
界に帰る術のない俺にはここで暮らすしか選択肢がないのかもしれない。

それならそうと早く割り切ろう。

いつまでも悩んでいたら、何かしらのチャンスがあったときに見逃してしまいかもしれない。

さて、そうなると当面の問題はどうやって衣食住を確保するかだ。

服はある。問題は食と住である。現時点では、さつき目の前の3人と一緒に食事をした村に戻り、どこかで働かせてもらうのが一番いいと思う。

よし、そうしよう。

ひとまず今後の資金を集めてそれからゆっくりと帰る方法を調べればいい。この時代は治安が相当悪かったらしいから下手に急いで失敗してしまつては元も子もないし、おとなしく待っていれば遠坂たちが迎えに来てくれるという可能性もある。

「それじゃいろいろ世話になつたよ、ありがとな。俺はまたさつきの村に戻るから、みんなはがんばってくれよ」

「? なにを言っているのだ?」

「だから張飛たちはこれから世直しのためにがんばるんだろう?」

「だから俺なりに応援したつもりなんだが…」

「なにを言つておられるのですか、ご主人様も一緒に来るんですよ?」

「なんでさ? さつきも言つたと思うけど、俺は君たちの言う『天の御遣い』じゃないんだぞ」

「え、絶対ご主人様が『天の御遣い』だよ。お願いだから私たちと一緒に来てくれないかな?」

「っていわれてもな、俺はそんな大層なやつじゃない」

そもそも俺にはこの戦乱の世の中を鎮めるだけの力、能力、才能はこれっぽちもない…… なんか自分で言っておいて落ち込むな。

とにかく、今まで努力して努力して努力して、それでもどうしようにも出来なかつた俺は天の御遣いの名を語れるなんて思えない。

「本当にだめなんですか？ 今のままじゃ、私たちだけの力じゃどうしようもないんです。わたしはともかく、愛紗ちゃんと鈴々ちゃんには力があります。けどそれでも足りない、みんなで力を集めなくちゃいけないんです。」

私たち3人の力を合わせたくらいだったら、できて治安をほんの少し良くするだけだと思います。でも私たちの夢はそんな小さいものじゃない。私たちが目指すのは、？みんなが笑顔でいられる世界？。それを叶えられるためにはならななだつてできません。

だから、私たちには力を貸してくれませんか？ 私と愛紗ちゃんと鈴々ちゃんとご主人様なら、絶対この国を良くしていけると思っています。

お願いです。私たちと一緒に来てくれませんか？ 一緒にこの国の笑顔を取り戻しませんか？」

確かにこの3人には覚悟、夢、実力、その全てがそろっている。それは一日にも満たない短時間だけ接した俺にもすっかりと伝わった。しかもその夢も俺の持っている？理想？とよく似ている。

正直にいったら応援してやりたい。自分にできることがあるのなら、たとえ死ぬほどき使われることになってもやっつてあげたい。

しかし、俺がいると確実に3人が迷惑するだろう。

この時代、三国志ではこれから数多くの戦が起こっていくのだろう。そんな中、俺は助けを求める声を無視できるのだろうか？

……無理だろう。絶対に助けに行つて、得たもの以上の被害を受けてしまう。

今までの経験からこれは確実だ。衛宮士郎が助けを求める手を無下に出来るはずがないのだから。

そしてそれは味方からすれば迷惑以外の何者でもない。

「やめておいたほうがいいぞ。俺を君たちの仲間に入れたっていい

「ことなんて何にもない」

「そんなことはありません。私たちだって天の御遣いだからといって無条件に仲間に加えようなどとは考えません」

「そうなのだ。さっき一緒にいて楽しかったから、仲間に入っつて言ってるのだ」

うれしくないといったら嘘になるが、それでも無理なものは無理だ。

「気持ちはずれ」どうしてもだめなんですか？　グスツ」「

劉備が涙目になって聞いてくる。

「お、おい。なんで泣くんだ？　こういうときはどうしたら…　ああ、関羽や張飛の白い目が痛い。どうにも俺は女の子の涙に弱い。」

「むー、つとそくだ。劉備が泣くのを止める方法なんて簡単だ。彼女たちの仲間になればいいのだ。」

「だが、それは本末転倒というものではないか。迷惑をかけないために断っているのに、彼女たちの一人が泣いたからといって仲間になるというのは馬鹿げているにもほどがある。」

「俺が彼女たちの仲間になることで、彼女たちが手に入れることの出来るものなんて高が知れている。そのくらいなら俺にだってわかる。俺には彼女たちをサポートできるだけの力はないし、迷惑をかけるだけのお荷物になる可能性だって大いにある。」

でも、

「わかった、わかったよ。なら俺も仲間に入らせてくれ。あんまり力になれないと思うけど、俺が出来ることならなんでもやるから」

でも、もしも俺が天の御遣いを名乗って、それで義勇兵を集められれば十分に彼女たちの力になるのではないだろうか。

正直、嘘について名前すら知らない人たちを戦場に送り出すのは気

が引ける。しかしこうでもしなければ彼女は泣き止まないし、このまま3人でやっていけるとも思えない。

だがそんな彼女たちでも、相手に匹敵する、または相手と大して変わらない戦力を有すればどうか？ 彼女たちなら見事に戦局をひっくり返してしまうのではないだろうか？

まだ彼女たちと知り合ったばかりの俺でも、それが決して実現不可能なことではないと思えてしまう。

それだけじゃない。彼女たちが目指しているものは俺の理想に似ている。

？大陸のみんなが笑顔で暮らせる国？という劉備の理想と？世界中の人間が幸せである？というエミヤシロウの理想

お互い、叶うはずがないただの理想だ。でも、絶対にかねえられない夢だからといって、それをしないよりは断然ました。

世界中を渡り歩いた。そうして、俺の理想は届くはずのないモノだつて分かった。

そう分かっているはずなのに、あきらめることの出来ないエミヤシロウの？原初の願い？

世界と契約までした皮肉屋 アーチャー 未来のオレでさえ、叶えることの出来なかつた夢物語

彼女たちの手助けをしたい。そんな気持ち俺の心のどこかにあったんだ。

それは同じ想いを持っているからとか、そんなものじゃない。彼女たちの、いや、彼女じゅんぷいがどのような結果を迎えるか、それが切実に見てみたい。

俺のように絶望してしまうのか？



それとも立ちほだかる？現実？を乗り越えてしまうのか？  
彼女は思ったように行かない、願ったようにはならない現実に、どのようにして気持ちの折り合いをつけるのであるのか？  
彼女の叶わないはずのその願いは、どのような結末を迎えることになるのだろうか？

俺は、それを見てみたいと思ってしまった。

まあでも、今散々偉そうな考えをしていたのだが、これもただのいわけだ。

彼女はこんな俺を必要としてくれた。ついさっき、会ったばかりの俺に仲間になってほしいと言ってくれた。

俺はなんて卑怯者なのだろうか。今まで必要とされなかったからといって、彼女たちと一緒にいたいといっているのだから。それでも…

俺を必要としてくれる人がいる

俺を信じてくれる人がいる

だから俺は、単純に彼女たちの仲間になりたいと思った

ただ、それだけなのだ

~~~~~

【白馬將軍】

俺たちは今、玉座の間にいる。

あの後、俺たちは今後からどうするかを話し合ったわけだが、このまま大陸中を歩き回ってもそれはただ『そこらの人間よりも強い4人組』どまりだ。

とてもじゃないが桃香の夢を叶えることは出来ないだろう。そこで、どうにかして自分の領地を手に入れようということになった。

だがそう決めたからといってすぐに手に入るわけじゃない。まずは何かしらの功績を挙げて、それで領地をもらおうということになったのだ。

そうなる自分たちの部隊が必要となる。いくら自分たちが強いからといって、それで何十、何百倍の人間と戦えるわけがない。

そこで問題になったのは資金だ。

部隊を作るためにはまとまったお金が必要なのだが、俺たちにはそれが明らかに欠落している。

この前、メシ代すら払うことが出来なかっただから当然といえば当然なのだが…

そこで桃香がひとつの意見を挙げてくれた。

なんでも桃香には現在太守をしている知り合いがいるらしい。

姓は公孫 名は贇。

いわずもがなあの？白馬將軍？である。

三国志についてあまり知らない俺でさえ知っている。三国志は本来魏、呉、蜀の将たちが有名なのだが、公孫贇が有名なのは後に蜀の王となる劉備が自分の理想を叶える一步を踏み出すため、縁を頼りに彼を訪ねるからだろう。

つまりは今の状況と全く一緒。

劉備がこの後自分の理想を叶えるためには決して欠かすことが出来ない人物だ。

武勇に優れ、戦術に優れ、またその人望から白馬將軍と数多くの民から慕われた。それに自分では敵わない相手と戦えばすぐに撤退もしていたとも聞いている。

俺が知っている限りそう欠点はなく、しいてあげるなら最後の籠城戦だろうか。

でも、今はその話は割愛しよう。

とりあえずその公孫贄が今、俺たちの目の前で桃香と話をしているわけなんだが。

「はぁー………！？」

この世界に来てからというものの、俺の描いてきた人物像とか、その想像っていうものは悉く壊されている気がするな！。

ちなみに今の叫び声は俺ではない。さっきから説明している女の子の公孫贄だ。

いや、もう過去の英雄が女の子だってことは、慣れてないけど慣れたと思いきもつ。……認めるしかないから。

だけど目の前の女の子があのか公孫贄だってことは結構ショックはうけてしまった。

確かに成績優秀だったという桃香が彼女と分かれてからというものずっと人助けをしていたと聞けば、それなりに驚くとは思うけど、俺にとつての公孫贄イメージは冷静沈着。まあひどく自分勝手なイメージなのだが…

それでも若くして小さいながらも自分の領地を持っている彼女が、人前であんなに叫ぶとは想像できない。

「はぁ、桃香らしいといつかなんといつか。…それで、そこにいるのが桃香の自慢の部下かい？」

「部下じゃないよ。みーんな私の大切な仲間。」

んとね、関雲長、張翼徳、それと都で噂になっている天の御遣い、衛宮士郎さん」

俺が天の御遣いと名乗るって約束はしたんだけど、なんとなく嘘つくのっていやなものだ。

「天の御遣い？ 天の御使いって、もしかしてあの管輅が言っていた？」

「そう！ 『流星とともに天の御使いが五台山の麓にやってくる』っていう占い知ってるよね？」

「知ってはいたが、まさか本当だったとはな。正直眉唾物だと思っただけだ……」

「ふふ、でもねちゃんと天の御遣いはいたの。士郎さんは本物の天の御遣いだよ？」

ああ、そんなこと言わないでほしい。なんか自分から名乗っているみたいでひどく恥ずかしい。

そもそも俺は天の御遣いなんかじゃないって言ったはずなのだが、まあいまはとりあえず俺たちのうわさというか、評判がほしいから仕方がないのだが、それにしたってそこまで言わなくてもいいんじゃないか？

ほら、公孫贇が俺のことを、それこそ足のつま先から頭のとっぺんまで訝しげに見ているじゃないか。

「こいつが天の御遣い？ どうみてもそれっぽくないよな」

公孫贇が小さな声で呟く。桃香には聞こえてなかったようだが俺にはしっかりと聞こえている。

わかりきっていたことだがそういう風に言われると傷つく。初めからわかっていたさ。俺がそんな、いかにも高貴な人間ですって容姿

をしてないことなんて。
それでももう少しやわらかく、傷つかないように言ってくれ。

「愛紗、なんかお兄ちゃんが一人で落ち込んでいるのだ」

「なっ！ ど、どうしたのですか？ なにかお気になるようなことでも」

「いや、なんでもない…」

さらに傷が広がる。

自分よりも若い女の子に心配されることがこんなにも情けないとは。

~~~~~

【龍】

「だから悪かったって」

公孫贇が謝ってくれている。先ほどの公孫贇の言葉で俺がかなり傷ついたことに気づいたのだろう。

だが公孫贇は知らない。俺は彼女に謝られれば謝られるほど自分の情けなさに落ち込んでいくことに。

「大丈夫ですか土郎さん？」

「ねえねえ、なんでお兄ちゃんはあるなに落ち込んでいるのだ？」

「さあ？ でもたぶん白蓮ちゃんのせいだと思っな」

「だーかーらー許してくれっ〜」

別に落ち込んでいるわけじゃない。

初めのほうは本当に落ち込んでいたのだが、それに気づいた公孫贇があわてて謝りに来て、そして公孫贇が桃香たちが白い眼で見られ

ている。

彼女たちにはもう俺が落ち込んでいないということは分かっているはず。

ちよっとした仕返しのもりだ。

「な、なあ桃香。どうすれば許してくれるか教えてくれ」

「え、そんなの士郎さんに直接聞いたほうがいいんじゃない？」

「どうすればいいんだ〜」

「はーはっはっは」

玉座に豪快な笑い声が響く。

公孫贖にはその声の主がわかっているのか、その声の方向に振り向き、すぐに文句を言い始める。

「くそー、笑うなー超雲」

は？ 超雲？ まさかあの超雲か？

それまで伏せていた顔をすぐに声のした方向へ向ける。

……そうだよな。いやわかっていたことだ、大丈夫、うん。だって今まであった英雄が全て女の子だったのに超雲だけが男なんて、そんなことないよな、やっぱり。ただどわずかばかりでも希望がなかったわけじゃないからやっぱり結構シヨックだ。

そつ、あの超雲子龍までもが女の子だった。

「ふふふ、失礼。そんな必死な伯珪殿、見たことございませんでしたから」

「仕方ないだろ。どうやっても元に戻ってくれないんだから」

「ふふ、伯珪殿もまだまだ甘い。そこで見ていた私の感想としては、この男は途中から伯珪殿をからかっていたな」

「な、なんだと!」

迷う素振りさえなくあっさりとはらされてしまった。

「おい、星が言ったことは本当か?」

公孫贇に襟を掴まれると、ガクガクと振られながら聞かれる。

星、というのもしかしくなくてもあそこで笑っている超雲の真名なのだろう。

こんな状況を作り出しておきながら全く助けようとせず、あまつさえ大きく口を開けて笑っていることからわかったことがある。

彼女からは『悪魔』のにおいがする。

「わ、悪かった。冗談のつもりだったんだけど、つ、つい面白くなつてな」

「なーんーだーとー!!」

さらに激しく振られる。

やばい、周りが暗くなっていく… そろそろやめてもらわないと本当にやばい。

「伯珪殿。そろそろおやめになられては? 死んでしまつかもしれないですよ、彼」

よく透き通る声が静止を促す。どう考えても助けるのが遅いだろう。公孫贇はその声を聞き、蒼く変わった俺の顔を見ると素直に襟から手を離れた。

公孫贇はフーフーを息を荒げ、俺はハーハーを酸素を求める。

「そうだな。仕返しもすんだし、許してやらなくてもない」

「いや、ゆるせよ！ 俺死んでもおかしくなかったんだぞ！？」

「む？ 自業自得だと思うのだが？」

いや、いくらなんでもやりすぎだ。

~~~~~

【軍】

目の前に広がる景色、公孫贄の軍隊が整列している。

「これでも正規兵半分、義勇兵半分の混成部隊だが、それでも数だけは集まった」

「すごいよー。こんなにいっぱい集めちゃうなんて」

たしかにすごい。

微動だにせず立ち、命令を待っている兵士たちには僅かばかり恐怖を感じる。

「いまや大陸の情勢は混沌とし、皆の心には危機感が強く出てきている。集めようとすれば、義勇兵だけでこれだけ集められるでしょう」

「確かに大陸のあちらこちらで山賊だ盗賊だと、匪賊たちの噂は聞かない日はないからな」

超雲と愛紗の言う通りなのだろう。

この時代、賊以上に恐れるものはそうそうない。飢饉や伝染病などはあるが、それでも賊のように頻繁には起こりはしない。

「うん、それでな、お前たちには左翼を率いて欲しい。左翼全部隊だ」

「部隊を率いた経験はないと言っておりましたが、関羽に張飛、それに天の御遣い様がいればどうにかなるだろう」

ぐっ、超雲のやつ。嫌味みたいに様付けするな。

それにしても、部隊長の経験がないとかそんなことよりも、いきなり現れた新参者に、左翼全部隊を預けるとは。

よほど信頼されているのか、人手不足なのか…

相手の数は五千に対し、こちらは三千。そのうちの千は任されたのだから信頼はされているとは思っただけけれど…

「さて、そろそろ出陣だ。今から死んでしまうような目にあうかもしれないけど、生きて欲しい」

「ふふ、士郎さん、我々をなめてもらっては困ります」

「そうなのだ！ 鈴々たちは絶対負けないのだ！」

愛紗と鈴々の目には自信の光。むしろ、それ以外、勝つこと以外考えられないのだろう。

そして俺も、彼女たちがこんなところで死んでしまうようには考えられなかった。

「わかった。なら、頼んだぞ。俺は愛紗と鈴々を信じる。だから、

この戦いで俺たちの仲間が傷つかないようにがんばってくれ」

「言われるまでもありません！」

「あつたりまえなのだ！！」

元気も自信もたっぷりだ。彼女たちからしても初めての戦であろうにたいしたものだ。

彼女たちがいれば、もしかすると俺なんていなくても大丈夫だったのかもしれない。

いや、確実に彼女達ならうまく立ち回れただろう。

「ふふ、なかなか部下思いなのだ、天の御遣い様は」

超雲が言う。

普通は戦の前にこんな風に言われることはないのだろうか？

あつたとしても、それは軍全体の前で演説をし、それによって士気を上げるためのものなのだと思う。

そんな風に思うのも当たり前前かと思いつつも、ひとつだけ勘違いしている超雲の間違いを正してやる。

「違うぞ、超雲。俺たちに主従関係はない。俺たちは、俺たちの仲間のことを心配してるだけだ」

だからこそ、初めはご主人様と呼んでいたのもやめてもらっただし、様をつけて呼ぶこともやめてもらった。

俺は対等な関係で、一緒に夢を追っていきかけた。

「む、そうだったのか。ふむ。すまないな、勘違いしていた」

「謝る必要はないよ。土郎さんがそう言ってるだけで、私たちはご主人様だっと思ってるんだから」

「いや、できればそう思うのもやめてほしいんだが…」

「そういえば公孫贖殿はどちらへ？」

「ああ、白蓮殿なら今頃演説だろう。これから大戦だ。皆の士気を上げるのは大将の仕事だからな」

『皆のもの、よく聞くんた！』

いままで幾度となく退治し、そのたびに逃げ散っていた賊どもも、

ついに今日が最後だ！ 我らの手で葬り去るうではないか！

どれだけの家族が、恋人が、友人が犠牲になったのか思い出せ！
思い出したのならばその怒りを力に変える！ 我ら以上にやつらを駆逐するに適する者たちたちがいるか！？ 我らこそやつらに天誅を下すのだ！

勇者たちよ、恐れることはない！ いまこそ功名の好機、己が力を存分に示すがいい！！！！」

声が聞こえたほうを見ると、公孫贄は剣を高々掲げ、皆の前で演説をしている。

『うおおおおおおー！！！！！！！！！！』

それに答えるように、一つの軍がまるで生き物のように雄叫びを上げる。

「っと、もうここにいる場合ではないな。それでは、お互い生きていればまた会おうじゃないか」

「縁起でもないこと言うな。俺たちは絶対に生き残って、そしてもう一度会う。そうだろ？」

「フフ、たしかにな。ならばこの戦が終わった後に会おうじゃないか」

超雲が去っていく。

そろそろ開戦なのだ。ついに、戦が始まってしまふ。

さつき超雲に言ったとはいえ、この戦が終わった後も今のように五体満足で立つてられるとは限らない。

それでも俺はやらなければならない 俺にはそうすることしかできないから

それでも俺は戦わなければならない
助けを求める手があるか
もしれないから

『皆の者!! 出陣だ!!』

『おおおおおお!!』

公孫贇が剣を振り下ろすと同時に、大地を揺るがす咆哮が響いた。

~~~~~

### 【初陣】

戦が始まった。

泥に塗れ、汗に汚れ、痛みに歯を食い縛り、人を殺すことになんら感傷も抱けないほどに神経が麻痺し、自分が生きるため、自分の生活を守るために敵を犠牲にする。

桃香、愛紗、鈴々たちには左翼の指揮をすべて任せている。

彼女たちはとても初めてとは思えないように部隊を動かしていたため、特に危ないことは起こらないだろう。

さて、そんな中俺が何をしているかといえば、敵の生け捕りを目的とした積極的な戦闘への参加だ。

戦い、気絶させ、縄で捕らえる。

ただ、相手だつてつかまれば今まで自分たちがしてきた罪の分、罰せられると分かっているため、そう簡単につかまってはくれない。  
当然だ。

ならばどうするか。

簡単なこと。相手が集まっている場所に切り込むからうまくいかない。

ならばこちらの部隊が突撃し、その時に散り散りになった極少数を

相手にすればいいのだ。

また一人。

両の手で持つ干将・莫耶で気絶させる。

10人の兵をもらい、気絶させた賊たちを縄で縛り、順に自軍の中に連れていってもらっている。

これは完全に俺の自己満足を満たしたいがための行動だ。本来ならば、一人でも多くの仲間が傷つかないように立ち回るべきだろう。だが、それができなかったのだ。

今、目の前で命を無くしていつている人たちも、当然、最初から賊だったわけがない。

成らざるを得なかったのだ。

成らないと死んでいたのだ。

必死に働いても、必ずしも高い税を払えるとは限らない。

田を取られ、村を追い出され、生き残る最後の手段として賊の仲間になった。

中には単に他人に暴力を振るうのが好きで、自ら賊になった奴もいるだろう。働くのがいやで、自ら賊になった奴もいるだろう。

しかし、大半が生きるために取った最後の手段だったはずなんだ。

誉められた方法ではない。しかし、だからといって俺にそれを責める権利はない。彼らが今までやってきたことを俺が責めても、意味がない。

大切なことはこれからだ。

これからをどう過ごし、奪っていった人たちに何を返していくか。奪ったからには生きなければならぬ。生きて、その罪を償わなくてはならない。

だからこそ一人でも多く生き残ってほしい。

「トレース・オン」

新しく縄を投影し、気絶させたやつらを運んでもらう。

俺についてきてくれていている兵士たちも、あまりいい顔をしているわけではない。

これも当然のことである。散々苦しめられたはずなのに、わざわざその本人たちを生かそうとっているのだから反発があってもおかしくない。

だからといって、俺も引き下がる気など毛頭ない。

こいつらはまだ罪を償うことが出来る。

だったらそれは、まだまだ生きてなきゃいけないってことなんだ。

~~~~~

【初陣後】

「どうやら私たちの圧勝のようですね」

「ああ、完全な勝利だ。よかったよかった」

超雲と公孫贇の会話。

先ほどまでの緊張感がないのは戦が終わったからだろう。

どんなに強くなるうと命が危険なことにはなにも変わりがない。身体が丈夫になっても命が丈夫になるわけではない。彼女たちにも恐怖というものがあるのだ。

「それはそうとだな」

公孫贇の鋭い視線が俺を貫く。

「士郎。なんでお前は賊を生け捕りにしたんだ」

それについて詰問されても仕方はなかっただろう。

「俺がそうしたいと思ったからだ」

飾る必要はない。自分が思っている言葉でそのまま返事をする。

「そうしたいと思ったからだ？」

「ああ、そうだ」

公孫賛、果ては超雲の視線までも強くなる。

「なら、お前があいつらを生かしておいて何がしたかったか、言ってみる」

「俺はあいつらに自分が犯した罪を償って欲しかった。それだけだ」

「何を馬鹿なことを。あいつらがどれだけの村を焼き払い、どれだけの人間を殺してきたと知っている。あいつらには血も涙もない。だからあんなやつらに罪を償えるはずがない！」

公孫賛の怒号。

彼女は確実に怒っている。それは彼女の優しさの証明にもなる。今まで殺されてきた人間のため彼女は必死に怒っているのだから。

「確かにそうかもしれない。でもあいつらだって生きなくちゃいけない。積み上げてしまった罪を償うために生きなくちゃいけないだ」

「勝手なことばかり言いやがって！ いいか？ あいつらに殺された人間はみんな一様に、あいつらの死を望んでいるはずなんだよ。自分の与えられた苦しみと同じだけの苦しみを味わわせることだけを望んでいるはずなんだよ。」

昨日今日来たお前に、なにがわかるって言うんだ!」

それでも俺は殺したくない。

殺されてしまった人には不幸なことだが、あいつらこそが彼らの最後の顔を見た人間なのだ。だからこそ、その顔を一生頭に焼き付けて生きていく人間が必要となるのだ。

俺がそう言おうとすると、

「なにもわからないよ」

そう、静かに桃香が反論の意を唱えた。

「白蓮ちゃん、私には何もわからないけど土郎さんの考えに賛成する」

「なっ、桃香まで!」

「うん。やっぱり人の命を取っておいて、死んで逃げちゃうのってなんか卑怯だよ。殺された人たちは無念だったかもしれないけど、だから私たちがあの人たちを殺しちゃいけないんだよ。

死んだ後には何もないかもしれない。だったら、あの人たちこそが私たちに殺された人たちのことを思い出させてくれる、この世で唯一のモノなんだよ」

桃香の言葉に公孫贄がたじろぐ。

「そ、そうかもしれないけどっ!」

「だったら、あやつらが逃げ出して、また徒党を組んで襲ってきたらどうするつもりだ?」

超雲の言葉。一切怒気を隠そうとしない質問。

その目は俺を鋭く射抜いている。

「……そうだったら、俺が殺す」

もしそうだったら、今まで以上の罪無き人間が死んでしまう。だからそのための責任は全て俺が受け持たなければならぬ。

「ほう？ 殺すか？ 簡単に言ってくれるじゃないか。我々が今までどれだけ苦労してきたと思っっているんだ？」

「知らないさ。お前たちがどれだけの年月あいつらを捕まえるために奔走してきたかも、どれだけの部下を失ったかも知らない。」

あいつらがこれから更正していくかなんてわからない。でも、だからってただ安直な死をくれてやるのも俺は許せない」

超雲が睨み、この場に一触即発のような緊張が生まれる。

しかし引くわけにはいかない。相手が言っていることが間違っているとは思っていないが、むしろ俺の考えのほうの間違っていると思うが、それを許容できたのなら俺は正義の味方など目指していない。

「……」

「……」

睨み合う。

超雲には引く気はないし、もちろん俺にしたって引く気など毛頭ない。

どちらかが折れるか、どちらかが一方を説得しなければならぬ状況で

「ぶっ」

と、超雲が笑った。

「クツクツ、アツハツハツハツハ」

啞然とする俺たち。

依然として笑う超雲。

「ククツ、フフフ、フハハハハ。わからない、か。クク、ずいぶん面白いことを言うんだな、御遣い様は。

いやいや、私もな、君がここまでしたんだからそれなりの考えがあつてだとか、どうにかして彼らを説得する方法があるからだとか、いろいろ考えていたんだ。しかし、フフフ、わからないとは、これまた斬新なことを言うじゃないか」

「星、なにを笑っている。早くこいつを説得して賊を始末しなければ……」

「フフ、いいんじゃないですか、伯珪殿。我々も、いや、あなただつてできるだけ死者を減らすために頑張っている。今回はこの天の御遣いとやらを信じてみましょう」

「し、しかしだな…… あー、わかった、わかったよ。私も信じるよ」

「感謝します」

超雲と公孫贄の間にどのような思いがあるかはわからないが、どうやら俺が生け捕りにした賊たちのことは許してくれるようだ。

「さて、わかっているな、衛宮士郎」

超雲が確認を取る。

それには賊の人間を生け捕りにした責任やその後の責任、あいつらに関わる全てを、自分の責任として受け持てるのか、と言う確認の意味がある。

もちろん俺の答えは決まっている。

「ああ、まかせろ！」

「クク、アハハハハ。プツ、ククク、こ、公孫贄殿、聞きましたね？　どうやら天の御遣いとやらは我々が想像していたものとは正反對の、ただのバカだったようです」

「むっ。超雲それは失礼じゃないか」

俺の決断を笑った挙句、バカ呼ばわりとは。いくらなんでもひどすぎるじゃないか。

「ふふ、失礼。私たちもそれなりに警戒していたのだよ。

考えても見る？　天から遣って来たとか公言している得体も知れぬ男が、主君の友人と一緒に来たんだぞ？　疑わないほうがどうかしてるじゃないか」

確かに…　まあ、俺が公言しているわけではないが、彼女たちからすればそうなるのだろう。

セイバーがにこやかにギルガメッシュを連れてくるようなものか？

いや、それはまた別の話か。

まあしかし。なんとなくはわかる。

どこからどう見ても怪しいんだろうな、俺。

「くく。ああ、信用させてもらおう、衛宮士郎殿。

あなたに彼らのことを託しましょう。あやつらだって皆が皆、悪人だったわけではないはずなんだ。だから託します。あの希望の無くなった顔を、笑顔にしてやってくれないか？」

そういう超雲の顔はただただ優しくかった。自分の子供に向けるような、柔らかで優しい微笑み。

言われなくてもわかっている。

「ああ、絶対だ。あいつらがやってきたことを後悔して、みんなに迷惑をかけたことを悔やんでも、絶対にあいつらの笑顔を取り戻す。前が悪人でも、過去を取り消せなくても、まだ未来が残っている。だからあきらめる必要なんて無いんだ。俺はあいつらに、そう思っ
て欲しい。みんな笑っていいってことを、誰も悲しまないでいい
てことをわかってほしいんだ」

それが俺の、俺たちの夢なんだから。

×恋姫1（後書き）

おかしいところはあげてください。

あと賊を生かしたのは後々使っていく予定ですので、そこを変えるつもりはありませんので。

恋姫2（前書き）

どうも遅くなりました。

はじめのほうから呼んでくださっている方は注意、説明文を少し変えたので確認してください。

恋姫 2

【仁の劉備】

今日は愛紗と一緒に街の見回りになることになった。

なった、という表現だけでは少し勘違いをしてしまうかもしれないのでいっておくが、俺達は元々は見回りする予定はなかったのだ。

今日は治安の向上を目指すために話し合いをしつつ、溜まっている書類の処理。

というような、警邏の担当でない日のいつも通りの仕事をするはずだった。

桃香が、彼女が戻ってきさえすれば…

連日同じような仕事ばかりで疲れている桃香が昼ごろに、『気分転換にちよつと歩いてくるね』といって外へ出てからも夕方だ。

ここは比較的犯罪が少ない場所だそうなのだが、ここまで遅いとさすがに心配しないわけにはいかない。というより、愛紗の不安が爆発してしまったのだ。

愛紗は桃香が出る時も護衛をつけたいといっていたしな。心配性だなー、なんて思っていたがあながち間違っていなかったらしい。

「どうしましょう、土郎さん。も、もし桃花さまがさらわれたりしていたら」

愛紗は心配そうな顔をしながら聞いてくる。確かに桃香は俺たちの中で一番戦う手段を持っていない。少しはできるとはいえ、本当に少しいだ。男たちに囲まれれば抵抗できないだろう。

「大丈夫だ。ここには俺たち、特に桃香のことを知らないやつらはいないさ。なにか桃香に悪いことがあったらすぐに俺たちに情報が来るはずだ」

「し、しかしですね」

と今まで心配そうに顔を青ざめていた愛紗だったが、広場のほうから聞こえてくる喧騒が大きくなってくるにつれ、徐々にその顔が呆れたものになっていく。

「お姉ちゃんあそんでー」

「あ、あはは。お姉ちゃん結構長居しちゃったからそろそろ帰らなきゃいけないんだけどなー」

「ええー。もつとあそぼうよー」

わずかばかり周りの道よりも広いそこは溢れんばかりの子供で満たされており、その中心で桃香が困ったように笑っていた。

「はあ、またですか」

それを見て愛紗は頭を抑えてため息をつく。

また、ということはどうやらこれは日常的な風景らしい。

「桃香様は見ての通り民に好かれていまして、私と一緒に警邏しているときもよくこのようなことに…」

「そ、そうなのか」

それはなんとというか、災難というべきなのか？

しかし桃香がみんなから慕われているという証拠にもなるし、んーなんだかなー。

「心配して損しました。土郎さん、帰りましょう」

「いいのか？ 桃香困ってるように見えるんだが…」

「いいんですよ。桃香様もあ見えて楽しんでいますから、私達は桃香様の分も仕事をしましょう」

いや、どう見ても困っているようにしか見えないんだが。

「そ、それならいいんだが」

「ええ、いいんです。私達が心配していることも知らずにこうやって遊んでいるですから。」

桃香様にとつてもいい気分転換になるでしょう。これは帰ってき
てから桃香様の働きに期待できるというものです」

なんか愛紗さん怒ってないですかー？

まああんなに心配していたのに、当の本人は遊んでいるみたいな感じだしな。実際は桃香の方が遊ばれているようにしか見えな
いだが、愛紗からすれば遊んでいたっていう事実は変わらない。

とここまで話して引き返そうとすると、桃香と目が合ってしまった。

桃香は助けてほしいそうな目でこちらをみている。

助けてあげますか？

「愛紗、桃香がこっちを」さあ行きましよう土郎さん。私達には山
のように仕事があるのですから！！」「」

遮られながらのその声は必要以上に大きな声だったから、当然桃香
にも聞こえているわけで。

ああ、ここからでも桃香がショックを受けているのがわかる。

「あーん。土郎さん、愛紗ちゃん待つてよー」

と桃香が半泣きになってこちらに走ってこようとしますが周りの子供達がそれ許してくれない。

うっ、と呻きながら潤んだ目でずっと見ている。

愛紗はというと、俺に振り返るなという無言のオーラを出し続けている。そのプレッシャーに耐えて振り向くたびに驚くほどの殺気を当てられてしまう。どうやら相当怒っているらしい。

「愛紗、やっぱり桃香と一緒に帰ったほうが良くないか？」

「まだ言うのですか？ 桃香様は気分転換しているのですから、それを邪魔するわけにはいきませんよ」

「桃香も少し前だったら気分転換になっていたかもしれないけどさ、今はどう見ても疲れてるだろ」

そういつて俺と愛紗はもう一度桃香を見る。

桃香はいまだに遊んで遊んでとせがむ子供達の中心でこっちを見つめている。

おそらくそこにいる子供達の母親であろう人たちが、俺達と桃香の空気に気づいたのか、笑いながら

「はは、嫌われちゃったみたいだね」と声をかけ、

「笑い事じゃないですよ！」と必死になっていた。

それにしても本当に桃香はみんなに慕われているんだな。

劉備は確かに人徳がすごいあるってことは知っているんだが、ここまで仲良くできるなんて一國を治める人間としていいのだろうか。人気があれば人が集まるのだからいいのかもしれないが、それにしてもあんなふうに友達感覚で接されているのは考え物じゃないか？

「おいてかないでえー」

と、ここでようやく子供達から解放された桃香がこちらに向かつて走ってくる。普段の桃香からでは考えられない速度で走り、迷うことなく愛紗に抱きついた。

それに愛紗は一瞬驚くが、さっきまでのすさまじい怒りはどこかに行ってしまったのか、仕方ないですね、と微笑んで桃香の体を抱く。劉備に惹きつけられるのは何も民だけではない。関羽、張飛をはじめとして歴史に名を残す英雄までもが惹かれるのだ。

「さあ戻りましょう桃香様」

「うん」

この世界の劉備玄德は俺の知っている劉備とは違う。しかしその本質的なものは同じなのだろう。

何もないところから蜀と呼ばれる国を作り、あの曹操や孫家らと戦うまでになる。それは並大抵のことじゃなく、劉備の下に優秀な将ばかりが集まったということを差し引いてもすごいことだ。

「桃香様、先に行っておきますけど、桃香様がやるべきお仕事はた
「っぷり残っていますからね」

「ええー。やってくれたっていいじゃない」

「こればかりは仕方ありません。ここの最高責任者は桃香様、あなたなんですから」

「な、なら士郎さんに頼めばよかったですんじや…」

とここで恨めしげな視線を送ってくるが、残念ながらそういうわけにもいかない。俺はあくまで助っ人みのようなもの。安請け合いたらいつかこの国の一大事のときにも同じようなことになってしまうかもしれない。

この国の方針は桃香が決めなければいけない。

「だめです。桃香様は今日あまりお仕事をやっていないではありませんか。毎日大変で疲れているとは思いますが、駆け出し中の私達には休む暇なんてないのです。」

明日の朝までには終わらせなくてはいけないので、今日は徹夜しなくてもがんばってください」

「うわーん。厳しいよー」

行きますよ、と愛紗は桃香の腕をつかんで引きずっていく。なんだかんだで桃香も抵抗していないが、それにしても人一人を軽々引きずっている愛紗にやはりあの関雲長なのだと再確認させられ、そして思いがけなく笑ってしまう。

想像していた人物像と少し似ていて少し違う。それがなぜだかおかしくてたまらない。

こんな光景の中に自分がいることがどうしてだか嬉しくなった。

~~~~~

### 【張翼徳】

姓は張、名は飛、字は翼徳。三国志を誇る豪傑の一人である。

関羽と並んで蜀と聞くと自然と頭の中に浮かぶ人物であり、その武勇はあえて語る必要もないくらいだ。

中国では彼の銅像が奉られており、いくつもの世紀を超えてなおその人気は留まることを知らない。またその銅像のせいか、彼のイメージは大きく、やや太っているというか、筋骨粒々ではあるが決してやせ細っている姿では想像されなと思う。

いきなりこんなことを言って何が言いたいのかというと、

今、俺の目の前で可愛らしい掛け声と共に恐ろしいほどの勢いで矛を振り回している小さな女の子を、”あの”張飛だとは信じたくない、ということだ。

この世界に来てから驚いたことは過去に飛ばされたこともそうだが、それよりも男性であるはずの人物が女性になっていたことだった。無論なんとなくではあるがそれに慣れ始めている自分がいるのだが、どうしても彼女だけは納得がいかない。

いくらなんでもギャップがありすぎる。

男性であるはずの人間が女性だった。それはいいだろう。

女性であるにも拘らずその能力は歴史に伝えられたものと遜色がない。まあ性別が違ってても同一人物であることには変わりないだろう。それも許せる。

しかし、2メートル近くあるといわれている大男が、”少女”だなんて、いくらなんでもあんまりだ。

今見ている鈴々の鍛錬の風景だって、どう見ても鈴々より重い矛を軽々振り回しているのはおかしいだろ。

「はっ、やあ、はあああ！！」

休むことなく振るわれるその矛は、実際に受けずともどれだけ重いか簡単わかる。やはり彼女の實力は歴史に語られる張飛と同じなのだろう。

『一人で一万の兵に匹敵する』といわれる張飛。

たとえ敵であっても対峙した者は称えざるを得ない、力強くも美しい剣舞。

「たあ、やつ、たあー！！ ……ん？ お兄ちゃんどうしたのだ？」  
どうやら鍛錬の様子を見ているのを鈴々に気づかれたようだ。邪魔にならないよう結構な距離を離していたはずなのにそれに気づくのはさすがというべきか。

「どんな鍛錬をしているのか気になってな。悪い」

「別に大丈夫なのだ。というよりなんで謝るのだ？」

「邪魔になったんじゃないか？」

「ちょうど今終わろうとしてたからぜんぜん邪魔じゃないのだ」

鈴々はにっこりと笑う。見ているだけでこっちまで幸せになれそうな笑顔だ。

鈴々は矛を壁に立てかけ、俺の近くまで歩いてくる。

「そつえば聞いてなかったが、どうして鈴々は桃香と一緒にこの大陸のために頑張っているんだ？」

「どうしてもなにもお姉ちゃんがそう言っているからなのだ」

「それはそうかもしれないが、少なくとも桃香に会う前からそういうことを考えていたんじゃないのか？」

「考えてたつていえば考えていたのだ。でも自分から何かしようと思つたのはお姉ちゃんに会ってからなのだ」

自分が国を救う、それがどれだけ大それたこと子供でもわかる。当然鈴々だってそうだったはずだ。

しかし桃香はそう思わなかった。

小さな力でも集まれば大きな力。彼女はそう信じていたのだろう。愛紗と鈴々を仲間にしてこの大陸を救うために尽力しようとしていた。今でこつして小さい街であるが任せてもらっているし、俺だつてこつして桃香と行動を共にしている。

彼女の夢は少しずつ形になろうとしているのだ。

「鈴々はお姉ちゃんに会ってから鈴々の大切な人を守るために鍛錬に励んでいるのだ。少しでも強くなっておかないと大変なのだ」

今こそ力をつけなければならぬ。全くもって鈴々の言うとおりだ。権力を持てば当然快く思わない輩が出てくる。そうでなくとも桃香の夢を叶えるためには戦う必要があるのだ。それを考えれば今のうちから強くなっておかなくてはならない。

「さあおにいちゃん、暇だったら鈴々と遊ぶのだ」

「暇ってわけじゃないだが」

「ん？ でもいま鈴々の鍛錬を見ていたのだ」

「そんな風に言われれば確かに暇そうに見えたかもしれないけどさ、ほら強い人の鍛錬ってなんとなく見てしまわないか？」

「ないのだ！」

言い切られてしまった。

「別にほかの人の鍛錬を見てたって鈴々は鈴々で戦うから関係ないのだ」

「それはそうだが…」

参考にするとかあるだろう。

「そんなことよりも早く遊ぶのだ」

「だから暇じゃない、っていうより鍛錬はしなくてもいいのか」

「今日の鍛錬はもう終わったのだ。やりすぎて体を壊しても意味が無いのだ」

その通りだ。鍛錬はいつでも戦えるようにするためのもの。やりすぎて体を壊すくらいだったら鍛錬はしないほうがいいだろう。

「じゃあご飯を食べに行かないか。時間もちょうどいいくらいだろ？ 少しくらいだったらおごるぞ」

「ホント？ だったら早く行くのだ！」

「言っておくが俺の財布で払える分はおごるが、それ以上は鈴々が払ってほしい」

鈴々がどれだけ食べるか知っているだけに下手に全部おごるとは言えない自分が悲しい。

「わかっているのだ。やっぱりお兄ちゃんは優しいのだ」

そういつて鈴々が抱きついてくる。

やっぱり素直でいい子だよな。大きくなってもこのままで育ってほしいものだ。

「さあもたもたしていちやだめなのだ。早く早く」

「ああ、わかってるさ」

抱きついている鈴々を持ち上げて肩車をする。

こうして鈴々と話をしてしているとイリヤのことを思い出す。二人で一緒に歩くときはほとんど手をつないで歩いていたのだが、たまにこうして肩車をしてやった。そのときのイリヤのことを思い出してしまふのだ。

イリヤもこれくらい素直だったら俺としては嬉しいんだがな。

「おおー、高いのだー」



はしゃぐ鈴々と一緒に街頭を歩く。

肩の軽い重み。俺はこの重みを守ることができるだろうか。

三国志が誇る豪傑の一人、張飛翼徳。

この子が今のようになんて笑っていられるよう頑張ろうと、今改めて思った。

~~~~~

【衛宮隊結成】

目が覚めたとき最初に思ったことは、なんで俺が生きているのか、ということだった。

長い間賊をやっていた。人を殺して、食い物を盗んで、土地を荒らしまわって。

そんな悪党には成敗が必要なのは世の常。びくびくしながら逃げて、盗んでの繰り返しをしていたら、少しずつ逃げ場をなくされていき、最後にはどこぞの豪族に追い詰められてしまった。

逃げ切らないと判断した俺たちは反撃することを選んだ。数では断然勝っている。俺の仲間たちは切迫していたんだろうが、俺にとっ

ては勝つても負けてもどちらでも構わない、そう思っていた。

なぜあの時、俺はそんなことを考えていたのだろうか？
死への絶望のせいかな？ それも少しはあったに違いない。だがおそらくはこのつまらなく、そして恐ろしい毎日からの開放を心のどこかに喜んでいたのが原因だったのだろう。

さすがは正規の兵隊だ。数では断然勝っているはずなのにどんどん俺たちの仲間が減っていく。俺が戦場に立たなければいけないのも時間の問題だった。

仲間たちの悲鳴が聞こえる。だんだん体が震えていくのがわかる。時々刻々と迫ってくる悲鳴や土煙が不安をかきたてる。

もしかしたら俺たちが殺してきたやつらも、こんな気持ちだったのだろうか。

そんなことばかり考えていたらもう目の前に兵隊が迫っていた。

怖い、死ぬのが怖い。

痛いのが、血が流れるのが、何もかもが怖い。

何度も俺がやってきたじゃないか。しかも相手は戦う手段さえ知らない子供も含めて俺は殺してきたんだぞ。何をいまさら怖がる。心配することなんかない、こんなやつらよりも、俺のほうが人の殺し方には詳しいじゃないか。

何度も何度も心の中でそう呟くが、どうしても心の恐怖を拭うことができない。

兵隊が剣を突き出しながら俺たちの集団に体当たりをしてきた。

鍛えられた兵隊の体当たりなんか俺たちが耐えられるはずもなく、派手にぶっ飛んでしまった。

そしてまた不安になる。しかもさっきと違い周りには味方がいないのだ。

気づいたときにはもう逃げ出してしまっていた。体が命令を待つ前に動き出していた。

こんな毎日からの解放なんてのだから手が出るほど欲しい。けど、死にたくはない。なにがこんな毎日からの開放だ。そんなことを頭の中では考えておいて実際殺されそうになってこんなに体が震えているじゃないか。

本当に俺は、なんて身勝手な男なんだろう。数え切れない数の人々を殺しておいて、自分だけは死にたくないなんて。

だから俺の目の前に、紅い服を纏った男が現れたときも、こうなることも今まででしかしてきたことの結果なんだと、納得できてしまった。

「降伏しろ」

手に持った短剣を突きつけ、それだけ呟く。

降伏か。確か降伏したいけど、結局それも死ぬことになるのと同じかわらないのだ。

俺は死ぬべき人間なんだろうけど……死ぬということがとてつもなく怖いのだ。仕方がないだろう。

男の質問を無視して剣を引き抜こうとした瞬間、首に衝撃を受ける。一瞬で俺の後ろに回り込んだ男に首を攻撃されたのだろう。

薄れていく意識の中、俺はようやく死ぬことを受け止めなければならないことがわかった。

そうやって、覚悟したはずだった。俺は今日ここで死んでしまうのだと。

なのに、なぜ俺は今こうして生きているのだ。

「ん？ 起きたのか」

その声を一緒に入ってきたのは、確かにあの時俺を気絶させた男だった。

「一人起きたことだし、ほかのやつらも起こすか」

男の言葉に、周りに俺と同じく賊をやっていたやつらがいることがわかった。

男は小屋の中で眠っている俺の仲間たちに声をかけたり、肩をさす

っている。
次々と起きていき、ついに最後のやつを起こしてからその男は話し始める。

「今日からお前たちには、みんなのために働いてもらうことにした」
その言葉を聴いて、寝ぼけ眼だったやつも含めみんなが、「は？」
と疑問を持った。

俺たちのしてきたことを考えると死刑なんて当たり前のことだし、
まして仕事をくれるなどと。
もはや夢物語だ。

「まあ、きついし給料もめっちゃ低いけどそこは我慢してくれよ」
「が、我慢してくれって。俺たち、本当に働けて、金ももらえるのかよ」

仲間の一人が興奮したように言うと、男は申し訳なさそうに頬をかく。

「先に言っとくけど本当に低いぞ」
「そ、そうじゃなくってよ。俺たち殺されるんじゃないのか？」

正直なところ、俺もそのことを聞きたかった。
数え切れない命を奪ってきた俺たちが、なぜ殺されないのかということ。

「ああ、俺はお前たちを殺しはしないさ。お前たちは何十、何百の人たちを殺してきたのかもしれないが、それでも俺はお前たちに生きていて欲しい」

「なんでだよ。この前の戦だって俺たちの仲間が殺されていった。なのに、なんで俺たちだけ……」

「……殺された人たちのこと、考えたことあるか？」

俺たちが殺してきた人たちのことが。

彼らが俺たちのことをどう考えているかってことだろうか。そんなの恨んでいるに決まっているじゃないか。生きるために一所懸命に働いていたのに、それを暴力で奪ったやつらのことを恨んでいないわけがない。

「そうだ。彼らはきつと、お前たちのことを恨んでいるだろう。彼らにとつては、お前たちが生きているということは耐えられないことなのかもしれない」

「そんなのわかりきったことじゃねえか！」

今度は別の仲間が怒鳴る。

考えたくないのだ。俺たちが犯してきた、罪の意識の象徴を。

「だけどな、今になってはお前たちが彼らの生きている姿を知っている人間なんだ。このまま時間が過ぎていけば誰もが賊に襲われて死んでしまった人のことを忘れてしまっただ、当事者のお前らを除いてな」

はっとする。

「お前たちはずっと逃げてきたんだ。それは討伐されることからだけじゃない。罪の意識からも逃げて、みんなで傷をなめ合っていたんだ。」

今まではそれで何とかやっていけたんだろうが、それは許されることじゃない。罪を犯したんなら償え。死ぬことはその罪と向き合

いもせずに逃げることと同じだ。少しでも罪を向き合って、殺した人たちに償うために生きるんだ。それはお前たちにしかできない」
確かに、死ぬということとは逃げることと同じ。

しかし、だからといって何の罰もなく生きていいのだろうか？

「でもよ、俺たちがしてきたことにはなんもしなくていいのか？」

今考えていたことと同じ意見だ。

「いつかわかるさ。お前たちが本当に罪と向き合っていけば、いつか俺がお前たちに与えた罰が、その苦しみがわかる」

この男が与えた罰？ そんなものあるのか？

死刑もなく、その上仕事まで用意してもらえる。何から何まで尽くされている。

「わかった。じゃあそろそろその仕事つてのを教えてくれ」

「ああ、そうだな」

男は一息ついてからまた話し始める。

「お前たちに頼む仕事は、普段はこの街の治安を守ることと、戦が起こったら俺と一緒に戦うこと、この二つだな」

治安を守る、ね。治安を悪くしていた俺たちにそんな仕事させるのか。

「交代で街の警備についてもらって、警備してないときは俺の指示する訓練をやってもらう。もちろん訓練内容を早く終わらせれば残

りの時間はお前らの自由にしてもいい」

なるほど、休み時間でさえ訓練しなければならぬのか。結構きつい仕事だな。

「あ、ちなみにこれがお前たちの一カ月分の給料だ。これでもできるだけ増やしたんだけど…」

そこに書かれている金額を見た俺たちは、一瞬目がおかしくなったと思った。

その金額では一週間分の飯の代金さえ賄うのに苦労しそうな額なのだ。これはいくらなんでも少なすぎる。

「おい、これじゃあ毎日の飯も用意できねえんだが…」

「ああ、それは俺が用意するから安心してくれ。そこに書かれているのは空いた時間とか、休みのときに自由に使っていいお金だ。まあ、それでも少なすぎるんだがな…」

飯の心配はしなくてもいいみたいだが、まあいいか。いくらなんでも、賊をやってきた俺たちがこれ以上を望むのは図々し過ぎる。

「いま俺たちの国が結構苦しくてな、その金額で限界なんだ。この国を栄えさせていけば少しずつ増やしていけると思う」

男は自嘲気味に、国というより街なんだがな、と呟く。

「いや、いいさ。俺たちは犯罪者だ。働いて金までもらえるなんてついでにくらいさ」

「すまないな。じゃあいまからこの街を案内するから着いてきてくれ」

ここまでしてもらって置いて、逆らおうと思ひもしない俺たちは立ち上がる。

そうすると男は急に何かを思い出したように、あっ、と呟くともう一度こちらのほうに振り返る。

「忘れてたから、いまから自己紹介するぞ。俺の名前は衛宮士郎だ。これから長い付き合いになるかもしれないから、よろしく頼む」

振り向いた男、衛宮士郎の顔は笑顔だった。その笑顔に俺は、ちゃんと罪に向き合って、この男が言っていた罪というものを受けなくちゃいけないだと自覚する。

運よく手に入れた、人生をやり直す機会だ。一所懸命にがんばろうではないか。

~~~~~

### 【案内】

「さつきは街って言ったけど、村って言った方が近いかな」

衛宮士郎はそう言いながら俺たちを案内してくれた。

ここまで見た感想だが、衛宮士郎の言うとおり村という表現のほうが近いのではなからうか。

一応店などもそれなりにあるとはいえ、どこにいても畑か田んぼが見える。

「警備する場所は自分が警備したほうがいいと思ったところだ。お



前たちがそこは危険だって、そう思うところを守ってくれ」

俺たちが危険だと思うところねえ。

まあ、俺たちも元を正せば犯罪を行う側。こいつよりもそういうところを理解しているのかもな。  
とこじで、

「あー、しろうだー」

「ほんとだー」

「ねーねー、いつしよにあそぼー？」

またもや衛宮士郎が子供たちに纏わりつかれる。

街案内が始まってからというもの、こいつは何度も同じように子供から遊びに誘われている。ずいぶんと好かれているみたいだ。

「すまん。今日はちょっと用事があつて遊べないんだ。また今度遊ぼうな」

しばらくの間、あそんであそんで、と駄々をこねていた子供たちだったが、残念そうに衛宮士郎から離れる。

「何度も待たせて悪いな」

「いや、それは構わないんだが… 人気者なんだな、あんたつて」

「人気者とは少し違うさ。こちら辺の子供の親はみんな農作業に忙しくて子供たちとは遊べないんだよ。あいつらもそれはわかっているし、毎日のようにみんなで遊んでいるけど、やっぱり新しい刺激のほうが魅力的に感じてしまう。大人一人加わるだけで、遊びつていっつのは驚くくらい幅が広がるからな」

そういえば今まで歩いてきて、農作業をしていない大人を見たのは

10人にも満たなかったな。

まあ、ちゃんと働いてるやつには子供と遊んでやる時間なんて仕事終わってから寝るまでの間しかないのだろう。

「つと、ここでおしまいだな。」

じゃあ俺はもう行くから、自分たちで二つの班を作ってくれ。片方が警備、片方が訓練するのは言ったよな？ 警備するときは一箇所に3人が理想的だけど、まあ人数が少ないから2人で一箇所の警備だ。基本的にお前たちが生活するのはさっき起きた場所で、あとで今日の飯もそこに持つてくるから」

そう言うと、衛宮士郎は区切るように咳払いをして、一気に雰囲気を変える。

「先に言っておくと、俺はお前たちの全ての責任を背負った。だからお前の中から一人でも逃げ出せば、俺はどこまでも追いかけて、そいつを殺す。それだけは覚えておいてくれ」

このときの衛宮士郎の目は鋭く、そして冷たかった。

あの時、戦場でこいつを見かけたときと同じ冷たい目。この目を見て、こいつの目を盗んで逃げ出すことなんて不可能だと悟った。

衛宮士郎はまた雰囲気を一変させて、今度は笑いかけてくる。

「まあこんなところだ。それじゃあ、後のことはお前たちに任せる。さっき言ったことは今日中に決めておいてくれ。またな」

とそこまで言うと走ってどこかに行ってしまった。

あいつにはあいつで仕事があるんだろう。それなのに俺たちに時間を割いたりしてくれたんだろうな。感謝だ。

「お、おい。あいつ本当に引っかまいたのか？」

「ああ。あいつ、このまま俺たちが逃げ出すとか考えてないのかよ？」

「ど、どうする？ 逃げちまうか？」

あいつが追って来れないくらい逃げ切つてどこかの賊に入れば、いままでもおり好き放題できることもわかっている。

それでも誰一人としてここから逃げ出そうとはしない。

それもそつだ。さつきあいつが行つてたんだ。

逃げ出せば殺す、と。

到底嘘に思えないし、少なくとも俺にはあいつから逃げ切れる自信はない。

それに、仕事があつて、毎日の飯があつて、寝るところもあつて、わずかながらの自由すらある。仕事の内容を考えればかなり厳しい労働条件だろうが、そもそも賊だった俺たちには破格の条件であることには変わらない。

こんなにも恵まれた環境の中で逃げ出してまた賊になるなんて馬鹿げている、みんなそう思っていることだろう。

それに幸か不幸か、今ここにいるのは俺たちの賊の中でも、もともとは働いていた連中だ。普通に働いていたのに、理不尽に追い出された連中だ。

ろくに助けもしてくれないくせに高い税金を取られ、それを払えなくなつて追い出された俺たち。

でもあいつなら、衛宮士郎ならこんな俺たちのことを助けてくれるんじゃないだろうか？

あいつと会つてからまだ一日もたつていない。でもなぜか信用してみたいと思える。あいつが俺たちのことを信用してくれたように。

もう一度やり直す機会を、殺してきた罪に向き合う機会を、あいつ

は与えてくれた。賊だった俺たちのことを信用さえしてくれている。  
だからこそ、俺は衛宮士郎について行ってみようかなと、そう思っ  
たのだ。

×まじこい（前書き）

真剣で私に恋しなさいとのクロスです。

×まじい

【帰還】 士郎

俺は今飛行機に乗っている。

理由は簡単。帰るためだ。

師匠たちに修行という名のいじめに耐え抜き、また一步正義の似方に近づいたと自分一人で納得しながら、

故郷 川神に帰っている。

「今まで何度もあったけど、やっぱり慣れないんだよなー」

千年城で修行している最中でも時々、無性にみんなに会いたくなくなってしまうときがある。特にそれが顕著に現れるのは金曜日だ。

今頃みんなは楽しくやってるんだろうか、そう思ったたびに師匠たちから逃げてしまいたくなる。

でもまあ、これも仕方がないことだろう。

小さいころからずっと一緒にいるのだから、そう思うのも自然なことなんだ。

数年前、あの紅い地獄から俺を助けてくれた正義の味方、衛宮切嗣が死んでしまったとき、俺は途方にくれていた。

不謹慎な言い方かもしれないが、爺さんが死んだということは目標が目の前から消えてしまったということでもあった。加えて俺には他に魔術を教えてくれる人間はいない。

悩んだ。

なにせ切嗣の前で誓ったのだから。

爺さんのような正義の味方になる、と。

そう誓ったはずなのに、もう俺には夢を追うチャンスを失ってしまったも同然だった。

今になって考えると、たとえ魔術を使えないとしてもみんなの役に立つくらいにはできるし、やり方しだいでは多くの人たちを助けることさえ可能だろう。しかし当時の俺にとって、魔術を使えないということはそれだけで俺と爺さんのただでさえ大きな差を広げられることのように感じたのだ。

爺さんに教えられたのはたった一つの魔術。

それだつて特別強いわけではなく、本当に魔術の基礎。たった一つの魔術だけでは正義の味方になれるわけが無いと、なんとなく思っていたのだ。

それでも俺は教えられていた魔術の鍛錬だけは欠かさなかった。もしかするとそれしかしがみつくものなかったからかもしれない。

そんな時、俺は“魔法使い”に出会った。

いや、出会ってしまったと考えるべきだろうか。

その魔法使いは爺さんの葬式に顔を出して、

「ん？ あんたつて切嗣の息子さん？」

と、何気なく話しかけてきた。

服装はジーパンに白いT・シャツ一枚と言つてもラフな格好で、いかにも？ 近くまで来たついで？ といった印象だった。

「ああ、そうだけど… お姉さんは誰なんだ？」

朧な記憶では、小さい頃の俺はそう答えたと思う。

とてもじゃないが、今の俺からしたら考えられない。

そんなぶっきらぼうで少し失礼な俺を、彼女は不思議そうに見た後に、

「へえー。あいつに娘以外で子供いたなんて知らなかったわ。けっこう可愛いじゃないの。」

っと、そうそう忘れるところだったわ。私が誰かって質問よね？」

ニヤリ、と。

次の瞬間がたまらなく楽しみだと、彼女はそんな笑い方をして、

「私は、蒼崎青子。結構有名人だけど聞いたことある？ 世界に5人しか存在しない魔法使いよ」

今でも鮮明に覚えている。

なんてたって、その頃の俺には、

彼女の笑顔が何よりもきれいに見えて

どこか、初めてあったときの切嗣と重ねてしまったから

回想終わり。

今思えば俺の人生最大の失敗って、この後の彼女に弟子入りを申し込んだことだろう。断言できる。

ほかに師事してくれる知り合いがいなかったとはいえ、修行で毎回半殺しにされるわ、当たり前のようにこき使われるわ、稼いだ金は頻繁に取られるわ。どうしてあの時の俺は切嗣の面影を思い出したのだろうか？ もしかしてそれだけ寂しかったってことか？

はあ、ため息しか出ない。



まあそれでも、悪いことしかなかったのか、と問われたのならそうじゃないと答えることができるだろう。

師匠のおかげで世界中で知り合いも増えだし、厳しい修行だけあって力もつけられた。やはり才能のない俺には普通の修行では足りない。才能のない分は他のところで補わなければならないのは修行といえど変わらないということだ。

そして何より俺が感謝しなければならないのは、風間ファミリーという世界一大切な仲間ができたことだ。きっかけは師匠の

「そうだ士郎、基本私は日本に来ることは少ないから、いつでも私のところに来れるよう、空港が近いところに引っ越しといてねー」

と言う一言だった。

驚いたとか怒ったとかよりも、あきれた。

だっていきなりだったんだぞ？ 仕方ないだろ？

だが、そのときの俺はすでに師匠の弟子、もといオモチヤだ。逆らえるわけもなく、泣く泣く冬木から引っ越しして川神に来たのだ。あの時のフジ姉の咆哮は今でも忘れられない。

で、引っ越しして転校生として学校に行った次の休日。いきなり、「遊ぼう」と誘われた。近所に住んでいた風間翔一が玄関で俺を待っていた。

その日から俺たちは一緒に遊んだ。風間翔一、通称キャップに、本当に小学生かと疑ってしまう直江大和、そしてその頃はすぐに泣いてしまう岡本一子。

後で俺を遊びに誘った理由を聞いてみたが、単純に転校生である俺に興味を持ったとか、なんか面白そうだったから、らしい。

毎日のように遊びまわっていると、少しずつ仲間も増えていく。  
モロに岳人、モモ先輩、そして最後に京。

あの頃は知らなかった話なのだが、京はいじめられていたそうだ。  
そのとき、俺は京とは同じクラスではなかった。修行、雑用、家事、  
勉強と一人暮らしに慣れていなかった俺にはなにかとやらなければ  
いけないことがあり、なんというかその、忙しかったのだ。

また俺の噂が学校の中で広がっていたらしく、俺が京のクラスの前  
を通るときはあからさまな嫌がらせをしなかったと聞いている。そ  
のため俺には京がいじめられていると言うことに気づくことができ  
なかった。

いつの間にか大和が京を救い、その後にいじめの内容を聞いて後悔  
したことは今でもはっきりと覚えている。

まあ、いまさらこんなこといっても言い訳にしかないのだが。

ただどいまになってそのことだけに気をとられる必要もないだろう。  
京も別にいいといってくれたし、今は大和にべた惚れである。

……時々、助けることができなくてよかったと思ってしまうときも  
ある

ポーン、という音に続いてキャビンアテンダントの声が聞こえて  
くる。

「・・・当機は数分後着陸態勢に入ります。シートベルトをお締め  
」

そろそろ日本に着くようだ。

俺は心を弾ませながら、シートベルトを締めた。

【川神】大和

「ふあゝあ、だりい」

「だらしないぞ直江大和。どうした、昨日は夜更かしでもしたのか？」

「昨日は私と一緒に、ね。フフフ」

「ああ（スルー）。昨日は遅くまで勉強やっててな」

「うう、無視された」

「すごいです大和さん。私も普段からやってはいるんですが睡眠時間を削ってまで勉強するとは、恐れ入ります」

「ホントパネえーなあー。さすがは軍師ってところか？」

「フン、まだまだ期末まで時間があるっていうのにわざわざ勉強するなんて、俺様には理解できんな」

「私もガクトの意見にさんせーい！」

「ガクトとワン子はいつも勉強してないでしょ」

「おーい、弟。こんな美少女を置いてけぼりにしてるんだ。お仕置きするぞ？」

「そうだそうだ。キャップである俺を差し置いてなに楽しそうに話してるんだ。ずるいぞー」

「それはいくらなんでも理不尽といえますか…」

「うるさいぞー大和。いいか、お前には一切の拒否権はない。黙って私にお仕置きされる」

いつものようにクリスと他愛のない話をして、京が既成事実を作ろうとして、まゆっちが松風と一緒に会話に参加して、ガクトやワン子がバカを言い、それにモロが突っ込み、姉さんとキャップが騒ぐ。最近になって新しく“風間ファミリー”に仲間を入れたが、何一つとして変わらない風景だ。

ただひとつだけ懸念がある。

衛宮士郎だ。

俺やワン子と、つまり風間ファミリー結成？ 当初のときから一緒にいた仲間だ。

士郎は長期休暇になるとロンドンまで行き、たいていは休み終わりの少し前に帰ってくる。

理由はロンドンにお世話になっている人や知り合い、師匠がいるそうたびたび帰らないとうるさいんだとか。

つまりその間俺たちは士郎に会えなくなる。俺たちは、たまには一緒に旅行したりしようと言ってはいるのだが、そういうわけにもいかないらしい。

その士郎が現在、5月7日になっても帰ってこない。

クリスとまゆつちには士郎のことは伝えてある。二人は（まゆつちは緊張していたようだ）士郎に早く会いたいと言ってくれている。だが、士郎には二人のことを言っていない。

あいつのことだから特に文句も言わずに二人を歓迎してくれると思うが、万が一ということがあつたらしく、話を聞くより実際に会つたほうがいいと思つたというのもあるが、そもそも連絡がつかない…  
一体いつになつたら帰ってくるんだらうか？

「おーい」

その後しばらく歩いてきた俺たちに向かって声がかげられた。

後ろから聞こえるその声は、小さい頃からずっと一緒にいて、毎日のように聞いていた声。

俺やキャップたち風間ファミリーはその声の主をすぐに理解して振り向く。

そこには褐色の肌に白い髪の、一瞬外国人と間違えてしまうような

長身の男がいた。

「士郎ー！！！」

ワン子が声に即座に反応。一目散にかけていき、抱きつく。

この男が風間ファミリー最後の一人、衛宮士郎だ。

突っ込んでいったワン子に対し士郎は一瞬驚いたような顔になり、そして優しく微笑むとワン子をやわらかく受け止め、頭を撫でる。

「ほえ〜」

ワン子は気持ちよさそうに目を細めるとそのまま士郎に身を預けた。ワン子は士郎に対して好意を持っている。それはキャップ、クリス、まゆっちを除くファミリーメンバーの周知の事実だ。

ワン子自身これが恋だと自覚してないだろうが…

初めて会った頃から面倒見の良かった士郎はなにかとワン子を構ってやっていた。ワン子が泣けば泣き止むまで傍にいてやったり、遠出したときは好奇心が強いワン子が迷子にならないようそばに付いてやったり、川神院に住み始めて修行を始めた時から

「俺の鍛錬のついでだ」

と言いつながらほとんどの修行を一緒にやっていた。

士郎を一言で言うつと優しい男だ。

しかもガクトの様に、“そうなるうと努力して”ではなく、それが自然であるかのように振舞うのが士郎らしいといえよう。

「久しぶりじゃねえか士郎。てゆーか、いつ帰ってきたんだよ？」

「昨日夜遅くだ。悪いな、連絡遅れて」

ばつが悪そうに頭をかきながら答えている。

「私の可愛い妹がとてつもなく寂しがっていたぞ、この私が嫉妬してしまつぐらいにな。それはそうと、今回はずいぶん遅かつたが何かあつたのか？」

「ホントに遅かつたからね。僕たち心配してたんだよ」

「ああ、悪かつた。今回で卒業まではロンドン行きが最後になるかもしれないって言われてな。少し長めに滞在することにしたんだ」  
「そうなんだ。じゃあしばらくはあつちに行かなくてもいいんだ。クク、良かつたね、大和。私たちの惚気話をいつでも聞いてくれる人が帰つてきたよ」

「悪いけどお友達で。それより士郎、本当にいかなくても良くなつたのか？」

「ああ。でも、それも絶対じゃないと思う。緊急で呼び出されることになるかもしれない。それでもすぐに帰れると思うけどな」

「おいおい」

俺たちが久しぶりの会話に花を咲かせているとキャップが呆れたように言う。

「そんな話すより、言わなくちゃいけねえことがあるだろう？」  
もしかして忘れてんじゃねえだろうな」

するとみんなは、そうかと納得したように、そのまま士郎の方を向  
き、

『おかえり』

と言う。

対して士郎は、その言葉に

「ただいま」

と満面の笑みで返した。

昔から変わらない儀式。士郎が帰ってくるたびに俺たちはこうして帰還を喜び合うのだ。

他者には、たとえ比較的親しい人間だろうが、この空気を壊すことはできないだろう。

……だというのに

「それで、いつまで自分たちを無視して話を進めるんだ？」

どうやらこのお嬢様には通じなかったらしい。

「あ、すまん。で、この二人は誰なんだ？」

士郎が疑問に思っていたであろうことを聞く。

俺やキャップ、姉さんならともかく、京やモロと一緒に登校するまで心を許している人間がいるのだ。疑問に思ってもおかしくはないだろう。

「僕のほうからでも連絡しようと思ってたんだけど、士郎の携帯に繋がらなかったから、今紹介するね」

モロはそう言つとクリスとまゆつちを自分の前に出させる。

「こいつらは新しく俺たち、風間ファミリーの仲間になったクリス

とまゆっち、あと松風だ！」

「自分はクリステイアーネ・フリードリヒだ。クリスと呼んでくれ」

「わ、わ、私は黛由紀江です！ よろしくお願ひします！！」

「オイラは松風っていうんだぜえー。夜露死苦！」

クリスはいつもどおりに、そしてまゆっちが緊張して自己紹介をする。

「よろしく、俺は衛宮士郎だ。クリスと黛と松風か。よろしく頼む」

士郎が手を差し出し、それを二人が交互に握手をする。

「ああ、よろしく」

「は、はい。どうかよろしくお願ひします」

クリスは普段どおりに、まゆっちはやはり人見知りしてしまったようにオドオドしながら握手していた。

### 【朝】大和

「今日は昼休みにそっち行かせてもらっぞ」

士郎が俺たちと離れていく。

あの後、士郎たちは意気投合できていた。

とくにまゆっちはずいぶんと士郎になついてしまったみたいだ。

士郎とまゆっちはお互いに料理を作れると知って、料理の話を楽しそうに話していた。ファミリーの中でも一番人見知りか激しいまゆっちがあんなに早く士郎と話すことに慣れてくれてよかったと思う。



「なんだ？ 士郎はF組じゃなかったのか？」

「そう。しかもS組だぜ」

「なに！？ そ、そうか。士郎は頭がよかったんだな」

「ちがうよ。大和や京よりも勉強はできないけど、それでも大和に勉強を教えてもらったりしてギリギリ喰らい付いてるってかんじ」

「そうか。努力してるんだな」

「ああ、俺が教えてやってもそこまで吸収できないから結構苦労するんだ。けどやっぱりな、仲間があんなにがんばってるのに邪険にもできないだろ？」

「しかし、それならばお前や京と同じように仲間がいるF組にいればよかったのにな」

「なんでも師匠がうるさいらしくて。僕たちもそう勧めたんだけど青い顔しながら断られたよ」

話しながら教室に入ると、クラスメイトたちが俺たちの顔を見て一斉に質問してきた。

「ねえねえ大和っち。今朝一緒に登校してたのって士郎君？」

「士郎のやつ帰ってきやがったのか？」

「お姉さんも、ぜひ教えてほしいです！！」

みんなが聞くのは士郎のことだけ。

士郎はS組にも関わらず、この学校での人気、人望がある。

それもすべて休み時間中の修理作業と、S組にいながらも決して威張らず、そして率先して困っている人たちに手を差し伸べるためだろう。

そんな士郎には多くの知人がいるそうだ。さすがに進んで知人作りをしている俺よりは少ないのだが、それでも男女、学年問わずにいる。

「ああ。昨夜帰ってきたらしい」

それからは無難に質問に答えていく。

そうしてある程度の質問に答えると、モロとガクトはヨンパチたちのところへ。俺、キャップ、ワン子、クリス、京は自分の席に座り、ワン子はダンベル上げ、京は読書を始める。

「やっぱりあれって土郎だったんだな。今年はずいぶん帰ってくるの遅かったけど、もしかしてあつちで金髪のきれいな姉ちゃんやっってたんじゃないかな？ やっべ想像したら……俺ちよっとトイレ行ってくるわ」

「相変わらずだなあ、ヨンパチは」

「まあ、それはないな。このナイスガイな俺様を差し置いて土郎のやつに女ができるなんて考えられねえ」

「土郎はガクトよりモテると思うけどね」

「うーん、僕もそう思うな。土郎君は優しいしさ」

「クマちゃんまで言うか。だけど、よく考えてみるよ。あいつだつて鍛えてはいるけど、俺ほどナイスガイじゃねえだろ」

「いや、筋肉だけで決まるものじゃないからね！」

遠くでガクトがよく分からない自論を訴え、モロが突っ込んでいる。

「にしても、ゲンさんまで土郎のこと聞いてくるなんて思わなかったよ。いつも喧嘩ばかりだから俺びっくり」

実はあの集団の中にちゃっかり源忠勝、通称ゲンさん、僕らのゲンさんがいたのだ。

でもゲンさんと土郎って表向きは結構仲が悪いイメージがある。会うと必ずと喋っていいほど喧嘩になる。

なんでそんなに喧嘩ばかりするのかと聞いてみたところ、

「あいつの声を聞くとどうしてもイライラする」

だそうだ。しかもこれは二人とも全く一緒の理由だった。

まあ生理的に受け付けないとか、どうしても仲良く出来ない人間は誰にでも存在する。それでも二人はそんな喧嘩をどこか楽しんでいるように見えなくもない。

実際のところ、仲が悪いのがよく分からないものだ。

「でもあんまり土郎のことばかり考えてると妬いちゃうからね！」

「なに言ってるんだボケ！ 変な勘違いはすんじゃねえぞ。俺はただ土郎に早く借りを返さなくちゃいけねえからだ」

こんな風に土郎は大勢の人間から好かれている。

さて、F組でさえこれだ。S組は今頃どうなっていることやら。

### 【昼休み】大和

昼休みになってから数分後、朝に言っていたように弁当を片手に携えた土郎がF組に入ってきた。

俺たちは机を集めて、弁当やパンを取り出す。

いくらファミリーといっても毎日みんな一緒に食べるわけではない。しかし、今日は数少ない土郎と一緒に昼食を食べることができている日である。

土郎は学園にいるとき、運動部や教師、一般生徒から多くの修理依頼を報酬もなしに受けている。種類もストーブ、エアコンなどの機

械からネットやハードルなどの部活道具、果ては服のほつれたところを縫ったりと幅広い。

士郎がいつそんなことをしているかというところ、専ら休み時間である。士郎への依頼は非常に多く、こうやって一緒に食べることができる機会はめったにない。

「……なにも10人全員で食べる必要なかったんじゃないか？」

「いえ、そんなことないわ。士郎に依頼が入ったら一緒にお昼ご飯食べられないじゃない」

「そうだけ。だから俺がみんなを集めておいた」

「それはそうだけど、教室で他クラスの人間含めて10人がいたら迷惑になるだろ……」

「まあいいじゃないか。今は周りに迷惑になるからとか、そんなくだらないことは考えなくて済め」

「それよりも士郎、また来てるよ。はあ、部長もホントにしつこいね」

教室の前では男女合わせて20人以上の生徒がこちらを見ている。その中でメガネをかけた女性が前に出て、それに続いて来る。

「邪魔するで候」

凜とした声。弓道部主将、矢場弓子だ。

「おおー、ユミじゃないか。どうした、私に用でもあるのか？」

「いえ、我々が用があるのは衛宮士郎で候」

「なんだ、つまらん」

「それで、早速に本題に入らせてもらおうで候。衛宮士郎、弓道部に入ってほしいで候」

「あのですね、何度も言ってるように俺には部活動をするだけの余裕がありません。ですからいくら矢場さんに言われても弓道部に入

ることは出来ません」

(なあ、大和。士郎は弓の腕も立つのか?)

クリスが疑問に思ったのか、声を潜めて聞いてくる。

(ああ。たぶんだけど、命中率なら京よりも上なんじゃないか?)

(え?! ほ、本当ですか京さん?)

(うん。悔しいけど、士郎よりもうまく当てられる自信はない)

実際俺が今まで見た限りでは、士郎は一度もはずしたことがない。いくら京でも毎回同じところに当てることは出来ないだろう。でも士郎なら何度射ってもはずさないと思う。

(そうだったんですか。京さんよりもうまく弓を当てられるなんてすごいんですね、士郎さんって)

(クク、でも実際戦ってみれば私のほうが強いよ)

(? どういう意味だ?)

(士郎はただ当てるのがうまいってだけで、京みたいに矢に気を籠めたり出来ないんだ)

(ああ、そういうことか)

(そうだ。だけど弓道部から見れば、のどから手が出るくらい士郎のことがほしいだろうさ)

(うん。士郎の射は見とれちゃうくらいだから)

(一度見てみたいものだな)

(いつか見れるさ)

「そこをどうにかお願いするで候」

「ですから、無理です。俺はバイトもあるし、ワンス子の修行も一緒にやっているんですから部活動できるだけの時間はないんです」

おっと、クリスとまゆっちに説明してたらいつの間にか話が進んだ。

「だから、京さんと同じで来れるときだけでいいから来ていいと言っているで候」

「それも何度も言ってるとおり、ほかの部員に失礼になるでしょう。毎日部活に出る部員だって毎回毎回矢場に立てるわけじゃないっていうのに、いきなり現れた人間が急に矢場に立つたら、よく思わない人間だつて出てくるはずですので、俺は弓道部には入れません」  
「うう、耳が痛い……」

なんか京がダメージを受けていた。

「それについても大丈夫で候。すでに部では話は付いているで候。だから衛宮殿は気にせずに入ってきたらいいで候」

「はあ、ですから……」

おー、土郎のやつ困っているな。

普通仲間をこんな風に強引に、何かを強要させようとして困らせたら俺たち全員でそれを阻止しようとするのだが、土郎が困っている絵を言うものは大変珍しく、なんとなくただこのときの土郎を助けようのがもつたいたいなく思ってしまったんだよな。  
でも、さすがに潮時か。

「部長、土郎も困っていますし、そろそろやめてもらえますか？」

京も俺と同じように思っていたのだろうか。その言葉には微量ながらも確かな怒気が感じられる。

「む、今日のところはこのくらいでやめることにするで候」

京の言葉に若干恐れられたのか、そのままおとなしく教室を後にする。

「助かった。ありがとう京」

矢場先輩が教室から出たのを確認した土郎は、そう京に礼を言った。京はすでに、なんとも思っていないように真っ赤なお弁当を食べながら、しょーもない、と言う。

「なんだ今日はもう終わりが」

姉さんが実につまらなさそうに呟く。

姉さんは土郎の弓道部勧誘のとき、いつも手を貸そうとしない。

俺たちと同じで土郎が困っている姿が面白いらしく、逆にそんな土郎を助けた俺たちが怒られてしまうといった始末だ。

「面白くないぞー京。あと少し待っとけばもっと面白かったのに」

「仲間の一人が困っていると云うのに…」

「ん？ 別に私は私が楽しめればいいからな」

「くっ、地獄に落ちろ、バトルマニア戦闘狂」

### 【放課後】 土郎

「よし、今日はバイトだな」

「えー。私の修行に付き合ってくれるんじゃないの？」

「長い間ご無沙汰だったからな。今日のところは挨拶に行かなくちゃいけないだろ」

「ぶー」

「後で埋め合わせするからさ、この通り」

「いいわ。でも明日からちゃんと付き合ってよね」

校門で一子と別れる。

今日はアルバイトに行っておっさんに挨拶することにした。

小さい頃からお世話になっていていただけあって、やっぱり帰ってきたことを報告に行かないのは失礼になるだろう。

俺がバイトをしている場所は居酒屋だ。

小さい頃、6年生とはいえまだまだ子供。小学生を雇ってくれる場所なんてほとんど、いや全くと言っていいほどなかった。

支払う給料の分だけちゃんと働けるか心配だったのだろう。そうではなくとも小さな子供を働かせるのは本人がどう思っているかが世間体が悪い。どこに行っても何かと理由をつけ、結局働かせてくれるところはなかった。

でもおっさんは違った。

その気さくな性格ゆえか、俺が頼み込んでわずか10分。すぐにOKを出してくれた。

それからずっとそこで働いている。俺が主に働いているところは厨房だ。つまみ、夕食、皿洗い。はじめのほうこそ酒にあうつまみなど造ったことのない俺は戸惑ったが、次第に慣れていき、今では俺が作るつまみが楽しみで来ていると言ってくれる常連さんまでできた。

「っと、もう着いたか」

考え事をしながら歩いていたらもう店の前まで着いた。俺が働いている場所は川神学園から歩いて15分という、近いのか遠いのか判別しにくいところにある。



ポロポロの外装にこれまたポロポロの看板。看板には『LIQUOR川神』と書かれている。

Liquorとはアルコール飲料とか酒とか言う意味で、居酒屋の名前としてわかりにくいのではないだろうか。

おっさんになんでこんな名前にしたかを聞いてみたことがあるのだが「狙ってみた」という、意味不明かつ完全に外している答えだった。

この店はあまり繁盛していない。

いや、たった一人のアルバイトとはいえ「サービス」といって、バイト代とは別に突然お金をくれたりすることもあるから、今のご時世繁盛している方なのかもしれないが、この店のお客さんといえばほとんど常連さんだけだ。

どっからどう見ても怪しさ全開。女性だけでなく、初めてのお客さんが入るには相当な勇気が必要だろうし、そもそも赤提灯さえさげないこの店が酒屋ではなく居酒屋だと分かる客はそういないと思う。

扉を開く。あけた瞬間、かすかなアルコールの匂いが俺の鼻につく。

「おー、土郎君じゃないか」

頭にタオルを巻いた割烹着姿の中年。

この人が通称おっさんだ。

「土郎君じゃないか、じゃない。まだ店も開いてないっていうのに酒なんか飲んで…」

「まあまあ硬いことは言わずにさ… 土郎君も飲む？」

「飲むか！ 学生に酒なんか勧めるな」

「はっはっは、じょーだんさ」

すでにいい感じに酔っ払ってるみたいだ。よくこんなで店をやっ

いけるな、と毎度のことながら疑問に思う。

「それより、帰ってきたんだな。今回はずいぶんと遅かったみたいだけど」

「まあな」

「それで、今日は働いちゃうの？ だったらみんなに連絡入れるけど」

「まあ出来れば、今日はギリギリまで働かせてもらいたいんだけど  
∴ 連絡ってなんでさ」

「そうそう、聞いてよ土郎君。みんなね、

『土郎君がいないんだったらわざわざこんなところまで来て飲む意味なんかない』

とか言っつてぜんぜん来てくれなかったんだよ。おかげでここ最近赤字続きさ」

みんなホントに薄情者だよ、おっさんはそう呟くとちびりと酒の飲んだ。

「よし」

そう言つと、おっさんはいきなり立ち上がった。

「それじゃあみんなに電話するからね」

ピ、ポ、パと電話をかけ始める。

そんなおっさんを尻目に、俺は厨房に入っつていった。

今日は何人お客さんが入るだろうか。狭いこの店の中で賑やかで楽しい、そんな光景を思い浮かべていると、自然と笑みが漏れた。

【帰り道】 士郎

今日はずいぶんと盛り上がった。

俺が帰ってきた祝いだとか、そんなことを言いながらみんなは普段は頼まない高めの酒やおつまみを頼んでくれた。

店を出て、今は自宅に向かっている。俺が住んでいるところは学園から30分以上あるボロアパートだ。

そうして歩いていると、河原に人影が見えた。

その人影は草の中で横になっており、全く動く気配はない。小さく呼吸の音が聞こえているので寝ているのだろうか？

それにしても無用心だ。

ここ川神は川神院によってある程度の平穏が保たれてはいるが、またその逆に川上院のために不良が集まってくる。若者の反逆精神とはなんとも恐ろしい。

……って、今はそんなことを考えている場合じゃないか。とりあえず起こしてやろう。

そう思い、その人影に近づくと

そうして近づいてみるとあきれた。

なんてたって寝ている人間が俺の知り合いだったからだ

「おーい、こんなところで寝てたら危ないぞ」

「ZZZ………スヤー」

肩をさする。だが起きる様子など全くない。

分かりきっていたことだ。こいつはちょっとやさつとでは全く起きることはないのだから。

「おーい、起きろー。風邪ひくぞー」

「ZZZ…ZZZ…」

根気よくゆすり続ける。

このままずっと起きないかもしれないなんて、そんな考えが浮かびかけたとき、「ん〜」という声とともにその重いまぶたが開いた。

「ああ……土郎だあ」

「久しぶりだな」

とくに手入れをしていない様に見える少しぼさぼさした頭の女性の名は、板垣辰子。

特徴としてはよく寝るといふことと、常に眠たいのか全ての動作がのろいということだ。

彼女と知り合ったのはスーパーの中。なんと信じられないことに彼女は精肉売り場の前で、立ったまま寝ていた。店員さんもすごく困っていて、それでなんとか俺が彼女を起こし、また眠ってしまったように彼女に買い物に付き合ったというのが彼女との交流の始まりだ。

なんでも愛する家族に奮発してお肉を買おうとして、でも家計にそこまで余裕はなくて、どうするか迷っているといつの間にか眠っていたらしい。

なんだそりゃ、と思わなくもないが、彼女と長いこと交流してればそれも彼女の日常なんだろうと納得できてしまう。

それからスーパーや街で会えば頻繁に話すようになっていった。

彼女も俺のことを気に入ってくれたらしい。

彼女が言うには彼女には姉、妹、弟がいて、4人で仲良く暮らしているそうだ。

そして俺に対し、まるで俺を兄のように接してくるのである。

イリヤをはじめとして、知り合いからよくお兄ちゃん属性と言われ

ている俺としては喜んでいいのか、同じ年にまでそう思われることに悲しむべきなのか……

「お帰りいゝ、士郎」

辰子が抱きついてくる。

彼女は異性に対しても結構大胆なスキンシップをとる。

まあそれもすごく辰子らしいと思えて、つつい笑みを浮かべてしまつ。

「ああ、ただいま」

それを受け止め、頭を撫でる。基本的に一子の扱い方を同じだ。

一子のときに感じる事ができないやわらかい感触は極力無視するものとする。

「それにしてもだ、辰子。なんであんなところで寝てたんだ？」

「んーとね。やっと士郎が帰ってきたって聞いたから……　ここで待ってたんだよー」

「…それで眠っていたってことか。はあ。あのな辰子、気持ちはずれいいんだがこんなところで眠ってたら危ないだろ。もしも辰子が危ない目にあつたりしたら、俺はそんなのは嫌だぞ。」

だから待ってくれてもいいからさ、暗くなったら帰ってくれ。家にお前の作る飯を待っている3人もいるんだろ？」

「んー……　わかったー。次からはそうするね」

本当にわかったのかは不明だが、とりあえず辰子をいったん引きはがし、河原から出て行く。

「確か辰子の家って隣町だったよな。もう遅いから送っていくよ」

「ホント？ 士郎がうちまでくるんだあ」

「ああ、それじゃあこれ以上遅くならないよう、急ぐぞ」  
「うん」

辰子は無邪気にはしゃいでいる。身長は高く、それこそ俺と同じくらいだけど、こつという姿は素直に可愛いと思う。

「士郎がお泊りだー」

「お泊りはしない！」

「ええ！！」

「なぜに驚く？！」

## 【帰宅】士郎

辰子を家に帰し、自分の家に着くと時刻はすでに1時を越えていた。4時間後からは一子の修行に付き合わなければならないため今すぐにも眠りたい、のだが宿題をやらなといけない。

とりあえず2時までやろう。それでも終わらなかつたら、あとは学園でやるしかないのだが、なんとかするしかない。

徹夜も出来ないこともないが、それだと一子の修行の足を引っ張ることになる。ひたむきにがんばっている一子の邪魔はしたくない。

初日からハードすぎるスケジュールだ。

ヴーヴー、と携帯がなる。画面に表示された文字を見ると、俺は驚き、急いで通話ボタンを押した。

表示には『蒼崎青子』

切嗣が死んで以来、俺の師匠となった魔法使い。

「なにかあつたんですか？」

とつた瞬間、尋ねる。

普段師匠から電話が来ることは少ない。せいぜい、いつまでに戻って来いだよ、次の依頼の話だのくらい。それ以外の連絡にはメールを使ってもらっている。そうすれば次になにをすればいいかなど、忘れないですむ。

だが、意外なことにそれは依頼の話ではなかった。代わりにとてつもなく馬鹿げていたのだが…

「えっ！！ ちよつ、ちよつとそれは…… それじゃって、まだ話は終わってないですよってああまだ切らないでください……」

ツーツと、むなしい電子音が俺の耳に聞こえる。

いろいろ納得できないところもあるが、まあいいか。確かにあの人は修行をやめるとは言ってたなかったもんな。

今まで以上にがんばらなくちゃいけなくなっただけど大丈夫だ。

そんなの俺が理想ゆめを掲げたときからわかってたことだ。どんなにつらくて苦しくても、あの時爺さんの前で誓ったときから決めていたことなんだ。

勇往邁進。

川神魂を胸に、がんばってみようじゃないか。

## ×まじい(後書き)

おかしいところは教えてください。

あと終わりの書き方のアドバイスしてください。自分はいつも苦手のようなので。









誰にも犯されること無き盾。

ならば、今尚一枚一枚破壊しているこの桜色の光は、一体なんだというのか。

「アアアアアーーーーー!!」

「ガアアアアーーーーー!!」

両者は力を緩めない。

一切手加減など考えない。

自分の切り札同士の対決。そのほぼ変わらない差は己の気合のみで埋めてみせるとも言っているかのような気迫。

されどその景色には変化は訪れない。

互いに一歩も引かない戦局。

ここに来てようやく衛宮士郎に焦りが生まれてきた。

今まで戦って気づいたことだが、おそらく彼女は何らかの組織の一員なのであろう。当然、ここで戦っているということも伝わっているはずだ。

ならば、彼女の仲間が応援に来ないと、どうして信じることができようか？

もともと相手の魔術が消えてからすぐ熾天覆う七つの円環を爆発させ、それを目くらましに逃げるつもりだった衛宮士郎としてはまったく持って誤算だったわけだ。

まさかこの規模の大魔術を、こんなに長時間継続されるなどと、伝説と呼ばれる最防の盾をここまで追い詰めるなどと、誰が予想できよう。

しかし、焦っているのは高町なのにも言えることだった。

今まで戦ってきた相手で、これほどまで自分の最強魔法が効かない相手はいなかった。

迷ったときは全力全開。

実に単純な話だが、今までの彼女にはそれで十分だったし、そのおかげで今日の彼女があるといってもいいだろう。

だが、今回に限ってそれが通用しない。

後先のことなど考えず、ありったけの魔力を流し込む。まさしく全力全開。だというのに押し切れていないはなぜなのか？

なんと堅い盾であろうか。

かつて敵対していたときの親友を貫き、闇の書を消滅させることに一役買った砲撃。

その砲撃をこうも見事にせき止められるとは。相手に対して感心もするが、同時に寂しさでも言おうか。彼女の心には暗く、重苦し  
いナニかがのしかかかってきていた。

そのナニか彼女に焦りをもたらしていたのだ。

「グツオオオオーー」

そうして、ついに衛宮士郎の盾【熾天覆う七つの円環】ロー・アイアスは最後の一枚になった。

歯を食いしばり、手に魔力を乗せ、力強く前に突き出す。

いまだに衛宮士郎はあきらめていない。

衛宮士郎は気づいていたのだ。だんだんと相手の魔術の威力が弱くなっていることに。

光を放ち続けている彼女がバケモノじみているからといって、バケモノではないのだ。

先ほどまではずっと、変わることはない衰えることのない威力であったのに、今は秒単位で弱く、細くなっている。

つまるところ、あと少しの我慢でいいということ。

あと少し、たったの一秒だけでも長く耐え切るだけでいいのだ。

踏ん張る

ここまでやって、紙一重で負けてしまいました、ではいくらなんでも悔しすぎる。

もう輝が入り始めている最後の一枚。それに賭けるしかないのだ。

そうして

「わりい、遅くなっちゃった。なのは、助けに来たぜ」

タイムリミット  
限界がやってきた。

×リリカルなのは【嘘予告】（後書き）

いろいろいいたいことはあると思いますが、ひどい批判をしないで下されば嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2229x/>

---

Fateクロス

2011年11月16日23時35分発行